

ブータンのラクク養殖とラククの利用

ラククの養殖(標高差を利用し夏・冬で移動)



この斜面の中腹(夏)と中腹(冬)でラククの養殖を行っている。
ナショナル・ハイウェイのイロハ坂

夏



冬



11月～5月頃 カンカルシン(インドナツメ *Zizyphus mauritiana*)を親木とし養殖を行う。種ラククとして夏の養殖に繋げるためのもの。

5月～10月末頃
ルルムシン(*Engelhardtia spicata*)を親木としラククの養殖を行う。収穫し、染料等として使う。写真は収穫期が近づいた枝とその断面。

ラククの染色 基本の煮染め



媒染にはゼム(ブムタン方言)、シンシャバ(東部方言)などと呼ばれるハイノキ属の木の葉を使う。

ラククに湯を注ぎ攪拌し、布で濾過して蠟・樹脂分を分離させる。湯を注いでもラククから色が出なくなるまで攪拌と濾過を繰り返す。染液の中に酸っぱいボケの実(*Choenomeles lagenaria*)のスライスを加え、先媒染した糸を入れて煮染めする。

低温で長く浸す



ぬるい湯を注いだラクク(濾過しない)に糸を入れる方法もある。ラククで染めた後から媒染する。

お酒の要領で発酵させる



濾過したラクク染液に、よく炒った大麦とイーストを加えて温かく保ちラクク染液を発酵させてから煮染めをする方法もある。(写真はデモ用なので少量で行っている)後媒染する。少量のラククで多くの糸が染まるようになるというが、いったい発酵によって何が起きたのだろうか？



染めた糸を洗って乾かすとき、緑の草の上に広げて直射日光に当てると良いという。ベテランが口をそろえているのだから、何か意味があるのだろう。